痛みにふれる、寄り添う

山口惠里子
人文社会科学研究科助教授

突然の腰痛にみまわれ、今、からだが痛みのなかに沈み込んでいる。立つことも、歩くことも、ままならない。からだはコルセットで固定され、息苦しい。「わたしの講義」の執筆依頼を受け、昨年度比較文化学類で行った「痛み」についての授業をとりあげようとおもい、内容を考えているうちに、ほんとうに痛みがからだを呑みこんでしまった。なんという偶然と感心しつつも、そう喜んではいられない痛みのなかで、原稿を書きすすめている。

痛みを晒す

授業で「痛み」について考えてみようとおもった理由は二つある。一つ目の出来事は、身体イメージの調査で北ギリシアの山村を訪れた際、聖母に捧げられた小さな教会で、イコンの聖母像に付けられた片方だけの「乳房」を目にしたことだった。この乳房は、「タマ」とよばれる誓願物で、母乳が出なかった女性が聖母に祈願して授乳できるようになった結果、聖母に感謝してイコンに付けたものだった。肉体性を喚起してはならないイコンの上で、小さな銀のまるい乳房はかすかなふくらみをもち、鈍い光を放っていた。この乳房について村人に聞いてみると、誰がいつ付けたものなのか、イコンに乳房を嵌め込むことを教会が許したのはなぜか、誰も知らない。「昔のことだよ」という答えが返ってくるだけだ。調査を続けるうちに、乳房のタマが、聖母への感謝のしるしであると同時に、母乳が出ない女性が経験した苦しみ、女性に向けられた村の「暴力」の痕跡のようにもおもえてきたのである。誰が付けたのかも伝えられていない乳房が、聖母の上に付けられたままでいる。村人はそれをとらないでいる。苦しみ、痛みが乳房という形になって、しかも感謝のしるしとして、聖堂の片隅に残されている。村人たちは聖母のイコンに祈

りを捧げるたびに、小さな乳房を目にしているのである。そうしてかれらは、名も知らない女性が嵌め込んだ乳房に含まれた喜びと痛みと共にいる。この乳房の出来事にふれ、ことばにできない痛みを「形」を通して共有するという現象について考えてみたくなったのだった。

もう一つの出来事は、親しい女性の死であった。聡明だった彼女は「これはわたしのからだではない」と言い残して、そのからだから魂を引き離した。喪失を生きるなかで、そのからだと、魂に、ふれたかった。一昨年、皮膚に関する授業をしたときに、アメリカの詩人シルヴィア・プラスの詩を読んだ。崩れそうな「私」とそれを被う社会的なマスクを、命ある花と花瓶（柩）に喩えるプラスの詩を訳していると、教室から消えたくなった。動揺を抑えようとして、わたしは大声で、詩を解釈しはじめたのだった。大声で解釈したことが恥ずかしかった。そして、「痛み」を真正面からとりあげてみようとおもった。

D. モリスの *The Culture of Pain* や E. スキャーリーの *The Body in Pain* を参照しながら、文学、演劇、芸術、映画等に表現される痛み、そして病の痛みにも学生とともに向き合った。モリスは文学者の立場から、広範な文字テクストを考察対象として、痛みが文化的、社会的、歴史的なコンテクストのなかで意味を変えていくことを論じている。だから、痛みにただ一つの意味を求めることや痛みの原因を解釈することは、無効であるという。このような主張の背景には、モリスが、精神を身体から切り離して論じてきた心身二元論を批判し、痛みを媒体にして精神、魂と身体を同じ枠組みのなかで論じたいと望んでいることがある。それゆえ、モリスは、痛みに意味を与えてすべて言語化してしまうことに異を唱え、痛みは言い間違いや言いよどみが頻繁におきる日常的な言語のなかに姿を現すという。身体が、言い間違い、言いよどみのなかにぬっと姿を現すように。

痛みがすべて言語に還元できないならば、痛みを伝え、共有することは可能なのだろうか。モリスは、フランスの哲学者レヴィナスを引いて、「傷つきやすさ（可傷性）」が開く間—人間的な関係に可能性を見出していた。レヴィナスがいう「傷つきやすさ」とは、他者の痛みに晒され、それに傷つけられる可能性であり、他者の代わりに苦しむことである。みずからが苦しむことになるのに、他者の痛みを引き受けるのだ。そういう痛みへの応答が責任を生むのだという。だが、ふいに他者の痛みに呼びかけられたとき、わたしたちは「応答」というよりも、その痛みにただみずからのからだを与え、預けることしかできないのではない

だろうか。痛みの分かち合いなどという以前に、わたしたちは痛みに晒され、じぶんの身体と他者の身体とのあいだに現れる痛みに満ちた場に投げ込まれるのだろう。その場は、言語に浸食されていない、応答のことばすら掻き消してしまう、身体的な場である。

痛みにふれる

先の乳房について書いた拙論では、そうした場に生まれる身体を共同的身体と呼び、またその場を「祈りの場」として述べた。母乳の出ない女性が祈る場だったからであり、乳房にまつわる説明や名前や由来が忘れられ、乳房に込められた祈りに村人がただ寄り添う場だったからであり、そして村人がその乳房に祈る場だったからである。

ミサが終わり皆が帰った後、一人の父親が、事故で障害を負った息子を乗せた車椅子を押しながら、乳房を剥き出しにした聖母のイコンにふれていた。毎年、聖母の祭りの日に村に帰省してイコンに祈るのだという。祈ることは文字通り聖母にふれることだった。父親は、硬く小さな乳房を付けられた聖母に手をあて、接吻し、聖母の痛みにふれていた。聖母の胸に「暴力的に」嵌め込まれた乳房は、祈る人を見つめる「傷」でもある。その傷が、痛みを回路として、祈りの沈黙のことばを聴いている。

痛みに寄り添う

昨年末、スーザン・ソンタグの訃報に接した。ソンタグの講演を聞いたのは、イギリス留学中の92年、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの戦禍が伝えられているときだった。講演でソンタグは、みずからの病の経験を織り込んだ写真論を展開していた。彼女が、ベケットの『ゴドーを待ちながら』をサラエヴォの地で演出したのはその翌年だった。授業で、主人公のエストラゴンとウラジーミルの習慣的な言語と、その裏に隠された言語化される以前のことばについて話しながら、当時のサラエヴォの非日常的な空間に『ゴドー』の舞台を設定したソンタグの試みをおもい、あらためて彼女の死を悼んだ。彼女は、空爆の最中、荒れ果てた劇場で待つという行為を上演したのだった。待つことは、祈ることでもある。

わたしが調査した北ギリシアの山村も、かつて激しい内戦を経験していた。村にある二軒のカフェニオは内戦を目撃したはずだが、村人たちは今、両方のカフェニオでコーヒーを飲み、内戦の話をしようとしない。かれらの経験した深い痛みは、言語化されないまま、あの乳房のように、からだに嵌め込められているのだろう。わたしは、かれらの羊飼いとしての思い出話を聞きながら、一緒にコーヒーを飲み、同じ夏の日の空気を吸う—そうして聖母の教会に続

く石畳の急な坂道を、かれらと共に急ぐのである。

こんな話に最後まで参加してくれた学生20数名は、痛みに晒され続けながら、ペインフルな授業にときに笑いをもたらし、ときに痛みに衰弱しながら、若さのもつさわやかな、しかしつよい優しさをいつも痛みに寄り添わせてくれた。かれらに感謝している。口ごもり、言い間違え、言いよどむわたしのことばを、かれらが紡いでくれていた。

(やまぐち　えりこ／イギリス文学・美術、人類学)